研　究　紀　要

図　書　館　部　会

講演
「本を読むこと・読ませること－書き手の側からの発信－」
青森中央学院大学　教授　北原　かな子 …… 1

研究協議１
「活字離れが進むスマホ世代の高校生たちのために－読書活動を推進する取り組み－」
青森県立青森西高等学校　長嶺　　海 …… 4

研究協議２
「生徒が使いやすい図書館を目指して」
青森県立田名部高等学校　南　　一彦 …… 6

部　会　の　動　き …… 8

研　究　テ　ー　マ …… 9

紀要編集委員　　小笠原　悦　子（青森県立八戸高等学校）

図　書　館　部　会

研究テーマ

「生きる力を育む学校図書館」

講　　演

「本を読むこと，読ませること―書き手の側からの発信―」

講師　青森中央学院大学看護学部教授・図書館情報センター長　北原　かな子

1　はじめに

私は宮城県の新設校である石巻西高校で，音楽の教員として社会に出た。2年目には生徒も教員も2倍になったが，音楽は1年生の必修であったため私の授業は増えず，免許外の世界史を3時間受け持つことになった。

このとき気付いたのは，音楽と世界史とでは，教員に向かう生徒の熱量が違うということである。世界史は「やらなきゃいけない教科」，音楽は「やらなくてもいい教科」であり，圧倒的に世界史の方が授業をしやすかった。今すぐの必要性が分かりにくいものについて，生徒の関心を引きながら授業をするには，ものすごいエネルギーが要る。この経験が後に生きてきたと感じている。

現在，私は看護学部に籍を置いている。医療関係の免許を持たない教員は私だけで，看護の学生はそもそも私の授業を取りに来ず，選択するのは年に4人ほどである。本を読むことも同じで，読まなくても済む状況で，どうやって本を読ませるか。この問いのルーツは，高校の新任教員時代の経験にあると感じている。

2　「書き手の側からの発信」という題に込めたこと

この題を付けた理由は二つある。一つは，大学1年生，いわば「高校4年生」に本を読ませることを，高校教育と大学教育のつなぎにしたいからである。もう一つは，私自身の「思いだけを綴った本」が出てしまったという特異な経験である。

今はnoteなどに思いしか書かれていない文章があふれ，それをまとめた本も出ている。私たちが経てきた「本を出すまでのプロセス」がすべて省かれ，真に受けてはいけない内容があってもチェックする機能がない。自分で出しておいて言うのも何だが，そう感じている。

そこで本日は，普段の研究の仕事から生まれる本と，プライベートで出てしまった本とを対比して話したい。誰もが文字を書き，公共の媒体で自分の意見や思いを言える時代に，本はどうあるべきか。教育をする立場として，何を本として生徒の手に届けるルートを作っていくべきか。その試行錯誤を紹介したい。

3　本には書いた人がいる

本を読む側でもあり書く側でもある立場から強く思うのは，本には書いた人がいるということである。書店に並んだ本を見て，私の娘の友達は「ここの本はみんな本屋さんが書いている」と言ったそうだ。

その例として，義江明子氏の『女帝の古代王権史』を紹介したい。千円もしないでこの水準の本を手にできる日本の新書文化には，ものすごい知力とエネルギーが詰まっている。著者は皇位継承のあり方を 20 数年研究し，古代の王権は男系男子の一系ではなく男女双系であったという結論を導き出した。研究書とはそういうものだと思う。20年かけた研究が1行になり，それが1冊の新書になっている。分かっても分からなくてもよいから，この水準の本はすべてそうした背景を持っていることを，まず学生に伝えている。

4　看護学部1年生に本を読ませる

看護学部では6月から実習が始まり，学生の意識は「看護師になるために必要なこと」へ一気に向かう。そのため，普通の大学生らしい雰囲気がある入学後の最初の2か月で，できる限りのことをしようとしている。看護教育が専門学校や短大から大学へと移ったのは，3年間の専門教育に1年を加え，教養科目を学ばせる意図があったはずである。放っておけば4年間の専門教育になりかねないため，そこに力を入れている。

放っておくと学生は全く本を読まない。ある学生に「君は一体何で大学に来たのか」と尋ねたところ，「大卒の資格を取りに来ました」と答えた。この勘違いを正さなければ申し訳ないと感じ，「世の中に1冊も本を読まないで卒業する大学生がいてはいけない」と伝えて，ある程度厳しく1冊を読ませるようにした。

「探究の基礎」では，最初の5回ほどで「読む」ことを徹底して教える。「見ている」ことと「読んでいる」ことの違いは何か。「読む」とは意味が分かることであり，文字列からイメージが立ち上がることである。説明

的文章で段落を意識し，筆者の主張を捉える訓練をする。著者が伝えたい情報と読者が受け取る情報は一致しなければならない。一番伝えたいのは，本を読むことは著者との対話だということである。読者からメッセージが届けば著者は喜ぶ。おかしいと思ったら出版社を通じて手紙を出せば著者に届くと伝えている。

本は最初，図書館で自由に選ばせていたが，留学生用の中国語の本を日本語の本と勘違いして借りてきた学生がいた。そこで新書から選ばせるようにしたが，新書も出版社によっては丸ごとは信用できない。現在は「岩波ジュニア新書」と「ちくまプリマー新書」を揃えており，いずれはこの中から選ばせようと考えている。

選び方としては，まずタイトルを見させる。私の本のタイトルも自分で考えたことはなく，大抵は編集者が付けてくれる。作曲者本人より別の人が演奏した方が整理されるように，タイトルは客観的なフィルターを通ったものである。次に目次を見させる。目次は著者の思考回路であり，考えた経路が表れている。読む前に，目次から受けるイメージを書かせる。その上で序論を読む。序論は全体が見えてから最後に書かれることが多く，全体像が出ている。相性が悪ければ，人間関係と同じように別の本に変えてよいとも伝えている。大事なのは書いた人がいることで，目の前に本当は著者がいるくらいの気持ちで読んでごらんと話している。

タイトルと目次を重視するのは，私自身が大学院時代，指導教官から大学の書庫の本すべてのタイトルと目次を見るよう鍛えられたからである。高校 4 年生だから分からないだろうという話ではない。分からなくてもよいからやらせて，自分が鍛えてもらったものを伝えていきたい。

課題では，要点を書くだけでなく，なぜそれを要点だと思ったのかを自分の言葉で書かせる。タイトルと目次から内容をまとめさせたものは学生間で共有する。60 人いれば 60 冊分の本を知ることができる。

5　研究書が世に出るまで

一つ目の本は研究書である。2020 年 1 月，私は 2015 年から 2018 年にかけて代表を務めた研究組織の成果を 1 冊にまとめて刊行した。その校正原稿は，本学図書館のスタッフが展示してくれた。初稿，再稿，三稿と並べると，赤字が消えていく様子が目で見て分かる。

この本ができるまでには，まず執筆者に原稿を出させる。締め切りを守らないのは論外である。出てきた原稿は編者がチェックし，直した方がよいものは一度全員に戻してから組んでいく。初稿の段階では出版社の編集者もチェックする。編集者は文章の誤りだけでなく内容の専門性まで全部見て，書かれている文献まで自分で確認するほどで，研究者以上に研究者である。編者も全員の原稿を回し，時にはほぼ書き直しに近いチェックを入れる。こうした何重ものチェックが，本が出るまでのプロセスの重要な部分である。本を出すとはこういうことだと，私は長い間思ってきた。

6　今一番気を付けなければならないこと

一方で，今一番気を付けなければならないと思うことがある。高校の探究学習はどうか分からないが，私の授業ではとにかく本を読ませる。しかしその後，学生は看護の各教員のもとで，インターネットで調べてプレゼンテーションにまとめるところまで行う。今の学生はそれが結構うまいが，私は一番大事なのは内容の読み取りだと思っている。検索して一番上に出てくる論文と称するものをダウンロードして使う例も多く，同じ大学生が書いたものより評価の定まったものを読みなさい，とよく話している。読んでいないのに文献を挙げてくる学生もいる。AI は私もよく使い，壁打ちには便利だが，自分の専門分野でしか使わない。違う分野では AI が適当なことを言っても分からないからである。何というか，筋のない怖い世界に生きている実感がある。

7　「思いだけを綴った本」が生まれるまで

二つ目は，note が本になったものである。2008 年 3 月，夫が倒れ，運ばれた集中治療室で重度の脳梗塞を発症した。2 週間ほどして，医師の言うことと違うと感じ，職業柄か，記録を取り始めた。最初はその記録を本にしようと考えたが，人のつらい話は読んでも面白くないと思い，活字になって世に出ることの怖さも感じて，やめた。その後，note という媒体を初めて使い，匿名で回復の記録を書き始めた。

その中に，夫に階段の昇降運動をさせた話を書いた。看護の常識では，脳卒中後の階段は真っ先に封じるものである。退院前にスロープや手すりを勧めるソーシャルワーカーに，私はうちでは必要ないと断った。結果，夫は半年後に歩いて退院できた。病院の言うとおりにしていたら，そこまではいかなかったと思う。

非常識とされるこの「攻めのリハビリ」を綴っていたところ，明治安田生命の動画の制作者から，題材にしたいというコメントが届き，1 か月ほどで動画化が決まった。さらに，知り合いのミネルヴァ書房の編集者に原稿を見せたところ，本も出ることになった。それが『夫の脳梗塞から一六年　「あきらめない」をやり通す』であり，この書名も編集者が考えてくれた。身元が特定されないよう注意して書き，垂れ流し状態で膨大な数が出ている note の中で，広めるための工夫も何もしていなかった記録が本になった。新聞やインターネットのニュー

スで取り上げられると，あっという間に Amazon で 1 位になった。日本ではメディアの力が非常に大きいことを実感した。本は自分の手を離れて広がっていった。

青森県の「藍」の取組は，元々夫が始めた仕事であり，私はそこを崩したくなかった。研究者としての矜持を守るには，それしかなかった。何のために本を書いたかといえばそこであり，どうやって生きてきたのかという人間の姿を描きたかった。夫が倒れたのは，藍の研究を実用化へ進めるという連絡の数日後であった。その後，夫の教え子たちが手伝ってくれ，研究は実用化へ向かった。藍の研究で最も大事なのは，恵まれた環境から上から降ってきた研究ではなく，教員を目指す学生たちが教員と共に，卒業研究という短い期間をつないでつないで発展させてきた研究だという点である。そのことを知っているからこそ，簡単には諦められなかった。

8　誰もが発信できる時代に何を読むか

本日は二つの本の作り方を話した。一つ目は，自信を持って世に問う研究書である。二つ目の私の本は，論拠が自分の経験しかなく，書いている間ずっと「これでいいのか」と不安であった。

その不安を感じずにブログを本にしている人は多いと思う。それでは，偽の情報がさらに偽の情報を生んでも気付かないのではないか。研究書には何重ものフィルターがあるが，フィルターのないまま思いだけが出てくる本が，出版社によっては新書になっている。かえって危険だと思う。新書だからといって油断できない。本学で「岩波ジュニア新書」や「ちくまプリマー新書」を揃え，そこから選ばせようとしているのも，それが理由の一つである。

また，教育の質自体も変化してきている。これは先生方の方がお詳しいと思うが，よく思うのは，今の生徒はテストの点数など「数字に落とし込む世界」で生きてきたため，点数化されないことへのイマジネーションが乏しいということである。特に進学校ではその傾向が強く，数字が人格になりかねない。一人の人間として生きていく上で最も大事な思春期に，物差しが点数しかないという状況が，実は現実なのではないか。私の一つ下の世代から共通一次試験が始まり，私が大学 4 年生の時の 1 年生は，空気が全く違っていた。自分をランキングさせることで生きてきてしまった生徒たちに，どうやって別の世界を開いていくのか。その難しさをよく感じる。

本を読んで，単に「思う」ことと「考える」ことの違いをどう教えるか。毎年試行錯誤している。伸びる学生もいれば，そのままの学生もいる。私を怖がって 1 冊読んだだけで卒業する学生もおそらく多いだろうが，それでも 1 冊は読んだことになる。「本を読まない大学生はこの世にいてはいけない」という趣旨で取り組んでいる。

9　おわりに

私自身，最近ようやくトラウマが取れ，ピアノの練習を始めた。音楽を職業にすると，楽しめなくなるのである。読書も同じではないかと思う。評価や価値判断にとらわれず，純粋に読書を楽しむことがあってよい。小説でもよい。そうした世界の楽しさをどう広げていけばよいのかを考えながら，毎回授業をしている。

ただし，大学教育であれば，きちんとした本をきちんと読む教育を一度はしたい。調べてまとめる学習も確かによいが，1 冊の本を 5 人で読み，互いに違う視点から話し合って深めていくやり方もあってよいと考える。

本を読むことは，それだけ可能性を開くことである。軽く書く人もいるだろうが，考えて書かれたものを考えて受け取る，そうした関係を作っていければと思う。今も試行錯誤中であり，ご意見をいただければうれしい。

研究協議１

「活字離れが進むスマホ世代の高校生たちのために ―読書活動を推進する取り組み―」

青森県立青森西高等学校　長嶺　海

１　はじめに

近年，情報機器の普及に伴い，高校生の「活字離れ」や不読率の上昇が深刻な課題となっている。生徒自身も読書の重要性や有用性を認識してはいるものの，日常的な読書習慣に結びついていないのが現状である。本校での生徒の読書に対する関心を行動へと繋げ、読書を促すための環境づくりと具体的な取り組みについて報告する。

２　読書活動をめぐる現状と本校の課題

文化庁や青森県の各種調査によると，情報機器の使用により高校生の不読率や読書時間の減少が顕著に見られる。特に高校生の 70.9%が「本を読まない（読む時間が少ない）」というデータは、読書時間が生活習慣から排除されている実態を示している。本校（普通科・生徒数約 700 名）においても，以下の３つの「接点の薄さ」が課題として浮かび上がった。

(1) 日常的な読書習慣の未定着： 読書行為自体を嫌っているわけではないが，実際の行動に移らない。
(2) 来館機会の不足： 必要性が生じるまで図書館を利用しない生徒が多い。
(3) 図書との偶発的な出会いの欠如： １年次の図書ガイダンス以降，継続的な利用に繋がっていない。

これらの課題を解決するため，「本を保管・貸し出しする場所」に留まらない、生徒の学習・情報センター，および安心して過ごせる「居場所（心理的安全性）」としての学校図書館の機能構築を目指した。

３　読書推進に向けた４つの具体的実践

（１）物理的環境の整備（快適に滞在できる図書館へ）

本校の図書館は２階に位置し，開放感のあるガラス張りの構造であるが，夏季の室温上昇が著しく利用者が激減する原因となっていた。今年度，エアコンが新設されたことで，夏季でも快適に読書や調べ学習ができる環境が整った。また，令和８年度の「学校図書館アシスト事業」を申請・活用し，県立図書館のアドバイスを受けながら，蔵書整理や廃棄予定図書の仕分けを進め，より機能的で魅力的な空間への刷新を図っている。

（２）「読む時間」と「動線」の創出

日常の生活サイクルの中に読書を組み込むため，今年度より週１回 10 分間の「朝読書」を導入した。この時間は，教員も同じ空間で共に読書を行うことを原則とし，一体感を持って取り組んでいる。さらに，寄贈図書を中心とした「青西文庫（300 冊以上）」を，全校生徒が必ず通過する玄関ホールに設置した。生徒の動線上に本を配置することで，図書館に足を運ばない生徒に対しても，日常的に本と出会うきっかけを提供している。

（３）総合的な探究の時間との連携

総合的な探究の時間における課題研究（文献調査）と図書館を連動させた。探究の初期段階（課題設定）において，必ずしも明確な目的を持たずに来館した場合でも，図書の背表紙を探索する中で自身の興味・関心を発見できるよう，教員側からの積極的な情報提供と接点づくりを行っている。

（４）図書委員による主体的な発信活動（「読む人」から「勧める人」へ）

高校生が本を読むきっかけとして「友人からの薦め」が上位に挙がる調査結果を踏まえ，図書委員（各クラス２名、計 36 名）による主体的な発信を強化した。

・リクエストボックスの設置とポップの制作： 職員室脇の廊下にボックスを設け，図書委員が制作したおすすめ本のポップと共に掲示し，生徒間の読書サイクルを誘発している。
・新聞記事の選定・掲示： 図書委員が自ら選んだ新聞記事を台紙に貼って廊下に掲示し，立ち止まって読む生徒を増やすなど，メディアに触れる機会を作っている。

４成果と今後の課題・展望

生徒への聞き取り調査では，「字を読むのは苦手だが、好きな内容なら読める」「自分で本を買って読むようになった」といった前向きな行動変容が見られた。一方で，元々読書習慣のない層（読書嫌いな生徒）へのアプローチについては，さらにその理由を分析し，支援策を講じる必要がある。

今後の展望として、以下の２点を進めていきたい。

(1) 全校アンケートの実施と教科・学年連携の深化： 読書実態の定量的把握と，教職員間の連携による組織的な読書指導体制の構築。
(2) ＩＣＴを活用した蔵書検索の指導： 生徒の個人端末から校内蔵書を検索できるシステムの普及，およびＡＩのリコメンド機能への依存を考慮した，主体的な情報収集力（情報リテラシー）の育成。

５おわりに

動画などの受動的なメディアが溢れる現代において，自ら活字を追い，深く思考する「読書」は極めて能動的な活動である。読書活動を生徒の意欲のみの課題とするのではなく，学校側が「環境」として機会を提供し続けることが重要である。今後も，読書が「やらされるもの」から「当たり前の習慣」へ，そして生徒の「人生の一部」となるような支援を継続していきたい。

研究協議２

「生徒が使いやすい図書館を目指して」

発表者　青森県立田名部高等学校　　南　　一　彦

１　はじめに

田名部高校は女子校として始まり，普通科に加えて約３０年間，衛生看護科を設置していた。また，英語科も一時期存在したが，令和３年に閉科した。創立百十周年記念式典を１１月２日に開催する予定であり，現在は普通科５クラス，約５５０人と，定時制の約６２人が在籍している。定時制と教室を共有しているため，一年生は放課後に机の中へ荷物を置けず，教室を明け渡す必要がある。そのため，放課後に図書館へ来て学習する生徒が多い。近年の進学状況については，以前より生徒の学力差が大きくなっており，学習についていくことが難しい生徒がいる一方，京都大学，東京工業大学，医学科などの難関大進学を実現する生徒もいる。国公立大学への合格者は近年，毎年およそ５０人に達している。

２　実践内容

（１）図書館について

図書館は中庭に面した校内でも恵まれた場所にある。本屋大賞の作品や新刊，月刊誌，週刊誌などを目立つ場所に展示し，生徒の興味を引く工夫をしている。図書委員会には３０人が所属し，昼休みや放課後の貸出業務を担当している。図書館の予算は雑誌と書籍を合わせて年間約３０万円と少ない。雑誌に１５万円，書籍に１５万円が配分されており，ニュートン，オレンジページ，アエラ，ダヴィンチ，ナショナルジオグラフィックなど幅広い雑誌を購入しているが，種類が多すぎるため，今後は見直しが必要だと考える。蔵書管理には「探検隊」を使用しており，登録冊数は約２２，０００冊と表示されている。しかし，実際にその冊数があるのか確信が持てず，今後は蔵書点検を実施する必要がある。英検や漢検，小論文，面接などの資格・進路対策用問題集も貸し出しており，特に英検関連の本はよく利用されている。これらはバーコードではなく，名前を記入するだけで１，２週間借りられるため，生徒が利用しやすい仕組みになっている。 館内には漫画のコーナー，教員や生徒が作成した本の紹介ポップ，学習スペースなども設けられている。テスト前には学習スペースが満席になるほど利用され，図書館は読書だけでなく勉強の場としても機能している。

（２）交流イベントの開催

一見活発そうに見える図書館だが，貸出数，利用者数は減少する方向にある。1 年間で本を多く借りた 10 人に対して多読賞として図書カードをあげている。1 位は 232 回，2 位は 44 回で 10 位になると年間 7 回でももらえるという寂しい結果になっている。図書館の利用促進を目的に，昨年から図書館カフェ，通称「図書館のねずみ」と呼ばれる交流イベントを実施した。昼休みに参加者が好きな本を持ち寄り，お菓子や飲み物を囲みながら紹介し合う内容である。総合的な学習の時間に図書館の活発化をテーマに発表した班がある。その内容をまとめる。図書館の利用者数を増やそうというテーマを設定した。若者の本離れや学校図書館の利用者が少ないなどの課題が挙げられ，読書に興味を向けるきっかけが少ないことが原因ではないかと考えた。図書館の利用状況は１日に４～５人ほどで新規の利用者，貸出数も少ない状況だった。レイアウトなど内装に工夫を凝らすと親しみを持ってもらえるのではないかと考えた。アンケートを取ったところ，レイアウトについては８７パーセントの人が満足しており，図書館を利用したことがあるという人が約５８パーセントいるのに対し，図書館にどんな本が置いてあるのかわからない人が多くいるとわかった。図書館を利用したことがない人は図書館に意識が向いていないし，時間や借りたい本がないと考えていることもわかったので，継続的に図書館を利用する人を増やすべきだと考えた。また，図書館に興味を引くことができ，居心地がいいと感じさせる取り組みが必要だと考えた。アンケートの記述質問の意見からイベントを行ってほしいという内容が何件か寄せられていたので，おすすめの本を紹介し合う交流会を 2 日間開催した。1 日目は一人も来ずに終わった。クラスルームでお知らせをして，教室にチラシを貼ってもらうなど宣伝をしたところ，2 日目は１０人の生徒が集まった。好きな本を持ち寄るか，タブレットで好きな本の画像を見せるなど紹介をして交流会が実現した。時間ギリギリまで伸びてしまった反省を生かして，次は 1 日に発表する人の人数を決めてゆったりとした交流会ができるように改善していきたい。今後も定期的にイベントを行うことができれば，イベントの知名度が上がり，利用者数が増加するのではないかと考えている。今後は，図書館専用のクラスルームを活用し，イベントの告知や希望図書の紹介を行う計画もある。また，館内のどこにどのジャンルや作家の本があるかを示す図書館マップを作成し，新入生には本の借り方講座を実施する予定である。これにより，図書館に読みたい本がないと思い込んでいる生徒や，利用方法が分からない生徒にも関心を持ってもらうことを目指している。

（３）今後の展望

今年も「ねずみプロジェクト」を継続するため，ランチミーティングを行い，生徒たちに今後の企画を考えてもらっている。生徒からは，周囲の視線を遮るパーティションや目隠しのある空間，柔らかい椅子やソファなど，落ち着いて

過ごせる場所を求める意見が出た。図書館を，単に本を読む場所ではなく，静かに勉強したり，安心して休憩したりできる場所として捉えている。例えば，机を減らしてゆったりしたレイアウトにすること，飲食しながら本について話せる図書館カフェ，音楽や美術作品を取り入れたスペシャルデー，映画鑑賞会，吹奏楽部による小規模な演奏会，トランプやウノなどのカードゲーム大会などが提案されている。私自身も，一定範囲で飲食を認めること，人工芝を敷いたくつろぎの空間や簡易テントを設置すること，BGM を流すことなどを構想している。これらの工夫によって，図書館をより親しみやすく，長く滞在したくなる場所に変えていきたいと考えている。しかし，生徒からは「どんな本があるのか分からない」「そもそも本を読む習慣や関心がない」「勉強や部活動で時間がない」「図書館は静かすぎる」といった声も出ている。

３　おわりに

卒業生による合格体験発表会の際に，ある生徒が「本を読むとどんなメリットがありますか」と質問した。読書を損得や進学，面接への有用性だけで捉えている現状に，寂しさを感じた。地域でも書店や文房具店が減少し，生徒が本に触れる機会は少なくなっている。市内で本を購入できる店は限られ，市立図書館は充実しているものの，高校生の利用は多くない。そのため，学校図書館を含め，どうすれば生徒が本に関心を持つのかが，教員にとって重要な課題となっている。私は，小学校高学年の頃に少年探偵団シリーズを読み，読書の面白さに目覚めた。高校時代には横溝正史の作品を多く読んだ。読書を始めたきっかけは，役に立つからではなく，作品そのものが面白かったからである。また，高校卒業後に読んだ『竜馬がゆく』から得た強い感動は，今でも忘れられない。中学校・高校時代の先生に，この期間に本をたくさん読みなさい，と言われたことを思い出す。高校生の時期に出会う本や映画は，一生の宝物になり得るので，多くの作品へ触れることが大切だ。そのため，読書だけに限定せず，映画なども含めて，生徒が心を動かされる作品に出会う機会を一つでも多く提供したい。

【質疑応答】

質問　プロジェクトに参加した生徒は，普段から面識がある生徒なのか，それとも自然に集まった生徒なのか。

回答　いつも図書館に来ている生徒が少しと，その友達というのが多い。パンフレット，ポスター，クラスルームで見て参加してみたいという生徒がほとんどだと思う。

質問　図書委員の仕事はカウンター当番以外にその他の仕事として，カフェを企画するなどと決めているのか。

回答　図書委員にはカウンターの仕事だけお願いしている。イベントは本好きの生徒が集まってやっていた。

質問　漫画本はいつから入れているのか。

回答　いつからかはわからない。貸出はしないで図書館でしか読めないようにしている。

部会の動き

高教研図書館部会関係（加盟校４０校）

４月１７日（金）第１回三八上北地区総会（於：七戸高校）
４月２１日（火）第１回役員会（於：青森県総合社会教育センター）
４月２４日（金）第１回東青下北地区部会（於：北斗高校）
４月２８日（火）第１回西北中弘地区部会（於：五所川原高校）
５月１５日（金）春季総会（於：青森県総合社会教育センター）
６月３０日（火）第２回西北中南地区部会（於：五所川原高校）
８月　６日（木）第３４回青森県高等学校図書委員研修大会実行委員会
（於:八戸市公民館）
９月　４日（金）令和８年度青森県高等学校教育研究会第４１回図書館部会研究大会
・秋季総会（於：青森県総合社会教育センター、主担当：西北中南地区）
９月１０日（木）令和８年度第３４回青森県高等学校図書委員研修大会
（於：はっちシアター１、八戸市公民館、主担当：三八上北地区）
［オンラインでの同時配信］
１０月２２日（木）　第７２回青森県青少年読書感想文コンクール審査会
（於：青森県総合社会教育センター）
１１月　６日（金）　西北中南地区図書委員研修会（於：弘前中央高校）
１１月１２日（木）　三八地区図書委員研修大会（於：八戸東高校）
１２月　２日（水）　三八上北地区職員研修会（於：八戸東高校）
１月　下旬　　第２回役員会
３月　中旬　　学校図書館部会報（第４６号）発行予定
３月　下旬　　会計監査

青森県学校図書館協議会（ＳＬＡ）関係

５月２９日（金）総会・全体研修会
１０月２８日（水）令和８年度研修会
場所：　青森県総合学校教育センター（予定）
内容：　「そだてるあおもり学校図書館コンファレンス」
※今年度は青森県教育委員会との共催の形で実施いたします。
１月上旬　第３６回読書感想画青森県コンクール審査
２月　　青少年読書感想文・感想画青森県コンクール入賞作品集『豊かな心』
第４６集発行

研　究　テ　ー　マ

紀要集	年度(平成)	研究テーマ	会　場	会員数	参加数	発表数
35	2	今，学校図書館では何ができるか	八戸東高校（八戸市）	195	62	3
36	3	豊かな心を養い，自ら学ぶ意欲を育てる 学校図書館教育をめざして（東北大会と併催）	県総合社会教育センター（青森市）	182	114	4
37	4	平成２年度と同テーマ	つがる富士見荘（鶴田町）	171	50	2
38	5	図書館の果たす役割を高めよう	むつ市公民館・田名部高校 （むつ市）	184	55	2
39	6	平成５年度と同テーマ	弘前高校・弘前プラザホテル （弘前市）	183	54	2
40	7	学校図書館の果たすべき役割は何か	三八教育会館・八戸高校図書館 （八戸市）	178	73	3
41	8	豊かな人間形成のために学校図書館の果たす役割はいかにあるべきか	青森県教育会館（青森市）	180	80	3
42	9	平成８年度と同テーマ	ふるさと交流圏民センター （五所川原市）	164	68	2
43	10	多様化した生徒の実態に即した図書館運営はどうあるべきか	古牧温泉（三沢市）	157	62	2
44	11	平成10年度と同テーマ	南田温泉ホテルアップルランド （平賀町）	166	76	2
45	12	平成10年度と同テーマ	青森厚生年金休暇センター（八戸市）	189	90	3
46	13	自ら学ぶ意欲を育て，豊かな心を養う学校図書館 （東北大会と併催）	県総合社会教育センター・市民文化ホール（青森市）	193	85	3
47	14	平成10年度と同テーマ	不老ふ死温泉（深浦町）	214	59	2
48	15	新指導要領実施にあたっての図書館の可能性を探る	薬研温泉　ホテルニュー薬研（大畑町）	174	59	2
49	16	これからの学校図書館の可能性を探る	弘前パークホテル（弘前市）	162	58	2
50	17	平成16年度と同テーマ	ウェルサンピア八戸　（八戸市）	155	73	2
51	18	学校図書館はいま何をなすべきか	アピオあおもり（青森市）	149	57	2
52	19	平成18年度と同テーマ	オルテンシア　ふるさと交流圏民センター（五所川原市）	136	52	2
53	20	平成18年度と同テーマ	下北文化会館（むつ市）	124	51	2
54	21	学校図書館の原点から	弘前文化センター（弘前市）	110	60	2
55	22	これからの学校図書館のあり方	八戸市福祉公民館（八戸市）	133	52	2
56	23	平成22年度と同テーマ	県総合社会教育センター（青森市）	106	54	2
57	24	図書館の「今」と「これから」	オルテンシア　ふるさと交流圏民センター（五所川原市）	122	46	2

58	25	豊かな心をはぐくみ，学びを広げる学校図書館 （東北大会と併催）	八戸グランドホテル 八戸市公会堂（八戸市）	129	80	6
59	26	学びを広げ豊かな未来を創造する学校図書館	青森県立図書館（青森市）	131	46	2
60	27	平成26年度と同テーマ	県総合社会教育センター（青森市）	122	44	2
61	28	自主の心を育み豊かな未来を創造する学校図書館	青森県立図書館（青森市）	121	52	2
62	29	生きる力を育み、豊かな未来を創造する学校図書館	青森県立図書館（青森市）	128	55	2
63	30	公立図書館との連携による学校図書館の活性化	青森県立図書館（青森市）	124	53	2
64	令和元	公共図書館とともにつくる学校図書館	青森県立図書館（青森市）	126	51	2
65	2	令和元年度と同テーマ　【中止】	青森県立図書館（青森市）	114	－	－
66	3	魅力ある学校図書館をつくるにはどうすればよいか	オンライン	99	35	2
67	4	いま、本を読むとは	オンライン	100	19	2
68	5	GIGAスクール時代の『学校図書館』の役割	オンライン	92	25	2
69	6	魅力あふれる図書館を目指して	県総合社会教育センター（青森市）	78	44	2
70	7	こどもまんなか青森　未来を担うこどもたちに生きる力を育む学校図書館	青森市男女共同参画プラザ（青森市）	65	50	3
71	8	生きる力を育む学校図書館	県総合社会教育センター（青森市）	56	32	2